
上野魔法陣異聞

直江和葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

上野魔法陣異聞

【Nコード】

N9218B

【作者名】

直江和葉

【あらすじ】

源博雅の生まれ変わりであるくたまき>は、強大な霊力を持つて生まれ、安倍晴明の生まれ変わりであるく太一>は霊力を持たなかった。ある夜、たまきは夢で慈眼と名乗る老僧に上野の結界を封じてほしいと頼まれた。

前編<1>

——安倍晴明再誕か？驚異の霊能力を持つ少女！——

その雑誌の見出しに、青年は目を止めた。持っていたつり革をはなして、棚に手を伸ばす。

某出版社の某誌である。軽薄な文面と、およそ誠意とか謙虚とかいったものから遠くかけ離れたシロモノで、当然、たびたび訴訟問題なども起こしながら、反省の色もなく次から次へと害毒を垂れ流している。

にもまして、買う人間がいるから始末におえない。

「……」

雑誌の表紙に書かれてある見出しと、件の少女と思われる写真を見ただけで頁をめくることがもなく、棚へと放り返してしまった。こんなものは捨てるに限るが、ゴミ箱まで手に持っているのさえ汚らしいように思えた。

そう思ったのも一瞬。

彼の思いは別にあつた。

（…ふん。安倍晴明再誕ね…。今世にもあいつがいれば、楽しからうに……）

青年の秀麗な面が物憂げに車窓に向けられた。電車はもう池袋に着く。

土曜も日曜もなく、家の周りをうろつく記者たちに、家のものはほとんどうんざりしていた。学校でもそうだ。登校から下校するときまで、モグラのように出没しては、彼女に霊力を見せてくれと言う。まるで、道端を歩いている手品師に手品を見せると言うように。

その煩わしさに耐えかね、しばらく学校を休んだほどだった。

今日は珍しく家の周りをうるつくものはいないようだ。

薄いピンクが基調の部屋は、レースとフリルをふんだんに使い女の子の部屋らしく、可愛らしいもので飾られている。

少女がベッドに寝転んで本を読んでいると、コンコンとドアがノックされた。

「はい」

ドアに掛けられた小さな花のリースが揺れ、母親の顔が覗いた。

「たまきさん、ちよっとお買い物行ってくるわね」

「いつてらっしゃい。私もちよっと外出するかも……」

「大丈夫？まだ、ヘンなのがうついてるようだけど……。ご近所さんも迷惑してるからって、警察に言ってくれたから前よりはひどくはないけれど」

母親の心配そうな顔に、彼女はにっこりと笑って手の平サイズのスプレー缶を振って見せた。

「大丈夫よ、お母さん。もし来たらスプレーかけてやるから」

この少女、藤原たまきは、桜庭学園高校に通っており、四月には三年生になる。

いわゆるお嬢様学校として名が通っている女子高で、ベンツやロールスのお迎えは当然、（朝は遠方の生徒のみ許されている）立ち居振舞いのお上品さは都内屈指という噂である。

そのお嬢様学校の「ミス桜庭学園」の名を冠する少女であった。

桜が街を彩りはじめた日曜日。

たまきは、池袋で電車を降りた。

別によく来るといっわけでもないが、今日はなんとなく、降りてしまっただけのことだ。

（「こちゃこちゃ」していて好きじゃないわ……）

小さく呟く。

その駅の地下道を西武百貨店方向に向かって歩きはじめた。
通りすぎる人々が、はっとして振り返る。

人形のような可愛らしい相貌を栗色の髪が縁取り、やわらかくウェーブをつくって、歩くたびにふわふわと肩先で揺れる。

白いワンピースがいつそう西洋人形のように見せていた。

もともと母親譲りの美貌は、近所の評判だったが、ある時期から……つまり、彼女の霊力が発現してからさらに際立つようになったのであるが、彼女いわく、

「見えなかったものが見えるようになったのだから、心身が多少変わるのは当たり前」
だそうだ。

西武百貨店のロフトへ行こうとオレンジロードに入ったときだった。

突然、たまきの脳裏にスパークが起こった。激しく点滅する光は目で見ているのか、脳で覚知しているのかわからなくなる。

そして、まるで、空間から突如現れたように視界に飛び込んできた一人の青年。

たまきの唇からほとばしった、ある言葉。
コトダマ

「セ、セイメイ……！」

青年がこちらを向いた。

彼は驚いたように目を見張る。

二人は理解した。——そうとしか言いようがなかった。

亜空間が全身を包み込む。時間がジェットコースターのような速さで遡りはじめた。

己が輪廻か、別のものか判断がつかぬうちに、いくつかの死、生、誕が逆向きに流れた。

そして——

あの時代。

闇と光が交錯する、鬼が生まれた時代。

陰陽師・安倍晴明と自分、自分と源博雅みなもとのはろまさがいたあの時代。

千年の時が、しばし彼らの脳裏を白一色に染め上げた。

少女と青年はお互いを凝視していた。

道行く人々は何事かと振り返ってゆくが、当の本人たちはそれどころではない。

端正な面立ちの青年は、確認するような声音で呟いた。

「博雅……？」

問われて少女が頷く。

「そうだ。晴明だな、お前……？」

更に数秒の確認。

「はっはあ！ いたのか、お前！ この時代に！」

「おうよ！ 久しぶりだな、晴明！」

歓声をあげ、がしっと抱き合った二人は、しばし叩き合って、互いをぎゅうぎゅう締め上げた。

「こっ……こらっ晴明！ 手加減しろ！ つぶれるっつ！」

博雅——たまき——は、じたばたと手足をばたつかせて、青年の手をもぎはなした。

不思議そうな顔をして、青年は改めて相手を見た。

頭一つ小さいほっそりした美少女が口を尖らせて、青年を軽く睨んでいる。

「……。なんかヘンだと思ったら、お前、女に生まれてたのか……」

今更のような言葉にむっとり口をつぐんだ。その沈黙が博雅にとつては不本意であるということを示している。

それは言っても詮無いことだが。

青年は、くつくつ笑って追い討ちをかけるように言った。

「博雅、前の生で女遊びが過ぎたんじゃないのか？」

勿論、冗談だったが、たまきの唇はますますとんがった。

——この時すでに、「ミス桜庭学園」は跡形もなく消え去ってしまっていた。

目白。この土地も高級住宅地である。

その一角に青年の住むマンションがあった。

「ほう。すごいマンションだな、清明。おぬしが借りてるのか？」
広いダイニングルームに通されたたまきは感嘆して、キョロキョロと部屋を見回す。

ベッドになりそうなソファがでんと置かれ、ガラステーブルを挟んで大きなプラズマテレビ。

ダイニングのほかに、三つほど部屋がある。

おそらく、他の部屋に入れば巨大コンパスだの、わけのわからない模型だの、本だのがぎっしりとつまっているはずだ。そうに違いない。

そんなたまきの内心をよそに、青年は軽く笑った。

「まさか。俺の両親の持ち物だ。これでも大学四年だぞ」

「ふうん」

大きなソファにちょこんと座った姿がなんとも記憶とそぐわなくて、彼は思わず吹き出した。

「なんだ？」

「いや。すまん、まだ名乗ってなかったな。安倍太一だ」

「あ、俺は藤原たまきだ。……けど、べつに清明でもよかろう？」

「かまわんよ。そのほうがしっくりくる」

しばらく、二人は思い出話に興じた。

「あ、そうだ。博雅、さっき買った雑誌……あれはお前か？」
「んん？」

太一がページをめくって、ある記事を指し示した。

先刻、青年が電車の中で見たものではなかったが、似たようなゴシップ雑誌だ。

途端、たまきは嫌そうな顔になった。

「これか。これのおかげで俺は家でのんびりもしてられなくなった」
「ほう」

「発端となったのがな、いつだったか親の知り合いの知り合いに頼まれて被いをやったことがあるのだ。まあ、霊感は多少あったんだが、被いなどの専門の知識はないからできんと最初は断ったんだ。けど、どうしても、といわれてな……」

その家は2年ほど前に立て直したばかりという。広い庭を半分ほど使って増築した。

その一角に祠があり、長い間放置されていて何が祭つてあるのかわからない。

大工は取り壊すのを嫌がったが、家の主人がかまわないというのでそのまま壊して家を建てた。

工事も支障なく終わって、しばらくは何事もなく過ごしていた。

それから1年ほどたったころ、ちょうど、祠のあったあたりから夜中になると床下からコンコンという音がする。何かが入りこんだのだろうと放っておいたが、日に日に音は大きくなり、しまいにはドカンドカンと岩でもぶつけられるような振動と騒音で、気味悪く思った家の主人は被いをすることにした。

そこまで話すと、青年は首を傾げた。

「解せんなあ……。その時点でなんで、お前のところにそのハナシがくるわけだ？」

「……。言つのもなんだが、靈感云々というより俺の顔に用があったらしいぞ」

太一は瞠目して——というより、あっけにとられ、
「叩つ切つてやったのか？」

その言葉に、たまきは鈴のような笑い声をあげた。

博雅であれば、咆えるように、という形容がふさわしかったろう。

「博雅である今だったらな。まあ、そんなことはどうでもよくて。

床下からな、人の顔をした蝦蟇ひきが出てきたよ。調べたら土地神を祭つていたことが判った」

「ふむ……」

「それがきっかけで、なんか、あちこち引つ張り出されるようになってな。……口コミであのザマだ」

少女は肩をすくめて、晴明はここにいるのに、と呟いた。

「ふふ……。なるほどね。博雅。今世では俺は晴明の記憶を持って生まれてきたが、霊力までは持つてはいないのだ」

「……本当か……っ？」

「ああ」

仰天して目の前の青年を見つめる。この男に霊力がないなんて信じられなかった。

青年は、あのと時のまま、やわらかに微笑んで自分の前に座っている。

「そんな顔をするな。別に不自由はしてはいない」

「しかし……」

「まあ、いいではないか。これもまた面白い。……で？　まだ何かあるんだろっ？」

「う、うん。鬼をな、よく見かける」

「鬼………？」

「表現が違うのかもしれん。しかし、俺には鬼としか言いようがない」

興味深そうに、太一の目が細められた。

なにしろ、安倍晴明という男は、この手のプロフェッショナルとして、平安時代に活躍した人物だ。こんなハナシを聞いて黙ってはい

られない。嬉々としてたまきの話を聞いている。

「……。清明、なんか嬉しそうだな……？」

不思議そうにたずねる親友に、”そうか？”と返す。

まあいいか、と呟いて、少女は先を進めた。

「でな、上野なんだがな、桜の力がだいぶん弱ってるようにも思えてなあ……。だいたい、鬼を見るのがあのへんなのだ。どういうことだと思う？」

太一はにっこりと笑った。

「博雅、鬼門だよ。たぶんな……」

黒い空間に、青白くぼんやりしたものがふわふわと揺れ、やがて、それは人の形に伸びて顔がぼうつと現れた。

老人だった。

「ほうほう、和音が聞こゆるのう。まことに妙なる和音じゃ。つかず、はなれず、してからに、また、なんたる強き光か……。なるほど、なるほど。わしもまだ、神仏に見放されておるわけではなかったようじゃ。やれやれ、助かったわい」

老人の声が空間にこだます。

闇の奥深くからうなるような声が響いてきた。

「ほ……。貴様らごとき怨霊どもにつかまるわけではないわ」

シウルシウルと伸びてきた黒い触手をひよいとかわし、老人は笑う。

「大陰陽師の再誕じゃもの……。ほほほ……。楽しみじゃのう」

老人の姿はもうそこにはなかった。

前編<2>

上野・寛永寺は江戸城の東北…より、ややずれた位置にある。

江戸時代、そこは天海僧正が江戸の護りとして、東叡山として移したものとされる。もともと、艮の護りは神田明神であつたらしい。「その裏鬼門には永田町にある山王日枝神社を置いて、江戸の風水を京都と同じようにしたらしいな」

上野公園を歩きながら、太一は、たまきにもわかるよう簡単に説明していく。

春休みの日曜日とあつてか、まだ三部咲きの桜を眺めながらデートしている高校生や、親子連れがあちこちに見える。

一週間前、二人は千二百年ぶりに再会した。博雅は霊力を持つて女として生まれ、晴明は霊力を持たず生まれた。

太一はたまきがその力に翻弄されぬよう、彼の知る知識を教授することにし、まずは、たまきが鬼を見るという上野に出かけてきたのだった。

話のオドロオドロしたのを除けば、デート中の美男美女カップルに見える。尤も、本人たちにはまったくその気は無さそうだが。

「天海つていや、あの怪物といわれた坊さんのことだろう？ ホントかうソか知らんが明智光秀だとも言われてるそうじゃないか」

「ははは。明智説は俺にはなんとも言えんな。そういう意味もひつくるめて怪物と言われたんだろが……。それだけではあるまいよ」

「それはそうだろうな。陰陽五行を自在にしたそうじゃないか、お前のように」

「……」

「なあ、晴明。面白いもんだな。魔除けとか祓いとかいった樹は桃だったのにな。なんで、桜になったんだろうな……」

たまきが言うのは桜の浄化作用のことだった。

「いや、博雅。桃は魔除けや厄祓いの樹だぞ。桜の浄化は、桜花の咲き方に由来するんだらうよ。」

太一の言葉に、ちよつと考える。咲き方、というよりは色のつき方が独特ではなかったか。

「樹の幹から色がつくられることか？」

「ああ。地下から桜色が幹を通り、末端の枝先に咲く花まで色を届けるのにどのくらいのエネルギーを使うんだらうな。その生命力に人は心を掴まれるのだらうよ」

太一は、桜を見上げ呟く。

「だけどな、博雅。忘れるな。生きている人間のエネルギーや、その力ほど強く美しいものはないのだ。まして、その中心にある”思い”がどれほどのものか、気づかぬ者のなんと多いことか……。

心気の方は人の人生の方向だ。……知っているか？ 人の脳はな、自分の可能性や希望を信じなくなったとき、あるいは、自分からあきらめたときに”滅び”のスイッチが入るんだそうだ」

「滅びのスイッチ？」

「簡単に言えば、その人間の血が途絶えていくということさ」

たまきは唸って腕組みをし、しばらく考えこんでいた。そして、ひとつ頷く。

「わかる気がする。地球という星の鼓動と、その上に生きる者の鼓動が重なるように、”生きる”という方向性がないものは排除されてしまうんだな……けど、それではあまりに可哀想だ……」

「——そうだな。しかし、人もまた何があっても、生きていかなくてはならないということかもしれん。強くなるためにな」

「強くなるためにか」

「強くなるためにだ」

しばらく、二人は思い思いの思索に浸りながら、ゆつたりと歩いていた。

が、やにわに、たまきが小さく声を発してへたりこんでしまった。

「博雅！ どうした？」

東京国立博物館を目前に、その先には徳川家の墓地があり、左手方向に寛永寺があるのだが……。

たまきの顔は蒼白になり小さく震えていた。

「晴明… 何ともないか……？ このあたり一帯の妖気を感じないか……？」

たまきの言葉に、青年は小首を傾げ何かを聞き取るような仕草でじつとしていたが、

「いや。多少寒気がするくらいだ。とにかく、今日は一旦帰ろう」
そう言つてたまきを立たせ、かばうように支えたと急いでその場から立ち去った。

太一のマンションに戻った二人は、紅茶を前に、しばらく無言だった。

夕闇がせまり、遠くのビルの明かりが宙に浮かんでいるように見える。

「何故、お前がこの力を持って生まれなかったんだろう……。お前なら、きっと昔のように自在に操るだろうに……」

たまきがぼつんと呟いた。

「重荷か、博雅？」

「——正直言つとな。持て余しておるよ。すべてが半透明に見えてくるようで怖くなる」

苦笑して、溜息と共に呟いたたまきに、太一はふわりと微笑した。

「……博雅、実を言つとな、あの雑誌の少女が俺の再誕なぞと言われて有頂天になっていたなら、檄を飛ばしてやろうと思つていた。しかし、その必要はなかった。俺としてはそれがお前で良かったと思つておるよ」

「——？ 何故だ……？」

「ふふつ。それはな、お前が博雅だからさ」

「わからんぞ。どういう意味だ????」

笑って答えない太一は、別のことを話し出した。

「……俺は土御門家つちみかどの遠縁にあたる安倍家に生まれ、太一という名をつけられた」

「太一とは北極星の意味だったか？」

「そのとおり。……俺が今霊力を持っていないのは言っただろ？にもかかわらず、厄介なことにな、憑かれ易い……というか、内包してしまう器を持っているのだ……今のお前にとって俺は諸刃の剣なのだよ」

白い、整った太一の顔を凝視して、しばらく絶句していたたまきは、かすれる声で訊いた

——お前は、お前自身を護る術を何一つ持つてはいないのか、と。

青年の頷きに少女の相貌は更に白くなった。

「もし……憑かれたらどうなるのだ……？」

「さあ……？ 死ぬまで鬼か蛇か」

「抜いはどうだ？」

「俺の意識が残っている間ならば、抜いもできよう。どうか。やったことないからどうとも言えんな。これだけ覚えていてくれ。俺の器というのはな、ブラックホールみたいなシロモノなのだ。だから……もしも憑かれたら、お前が俺を楽しんでくれ」

「ど、どういう意味だ……」

「俺が狂ったなら、お前が俺を殺してくれ」

まっすぐな目が少女を捉えている。

青ざめ、ふるふると震えていた少女は一気に爆発した。

「できんっ！」

怒りが陽炎のように少女の体から噴き上げている。

悲しみと、切なさ、いろんなものがないまぜって、まるで、それがたまきの持つ”色”であるかのように輝いて——。

「俺にはお前を殺すなど、絶対にできん！！ さつき、お前が言ったのだぞ、人は何があっても生きていかなばならんと、強くなるために生きるのだと、そう言ったのはお前ではないかっ！ それは…もし、もしもだ、万万が一、お前が何かに憑かれ苦しんでいるのなら、この博雅がお前を楽にしてやる！ しかしだ！ 何の策も講じておらん今から、そんな約束はできん！」

仁王立ちの少女を見上げ、青年はしばらく黙っていた。

たまきは、今日あのままあそこを進んでいたら、この男はどうなっていたのか——そう思うと冷水を浴びたような心地がする。

冗談ではない。

あのときの妖気ときたら、とてつもなく強く禍々しいものだったのだ。

太一が何か言おうと口を開きかけたが、それは少女の強い口調に遮られた。

「どうすればいいのだ？」

「？」

「お前を護る呪なり、法 नाही のか？」

苦笑する青年を真っ直ぐ睨みつけ、たまきは厳然と言い放った。

「靈力があるうとなかろうと、お前は晴明だ」

「うん」

「では、この博雅が何とかするしかないではないか！」

また、しばらくの沈黙の後、太一は今度こそ破顔した。

「やっぱり博雅だ、と呟いて——」。

後編<1>

清めと護りの法に、反閉^{へんぱい}——兎歩^{うほ}——というものがある。北斗七星の形や八卦の意味を込めた歩行呪術だ。

たまきは、翌日から学校の帰りに太一のマンションに寄り、これを体得しようと試みた。

マンションもろともバリアを張ってやるっ！ との強き誓願のもとに、毎日元氣に通ってくる。

昔のように酒を酌み交わせないのがつまらんとは、二人の共通の言葉だった。

「たまきお姉さま」

校門を出かかったところで呼び止められ、たまきは振り向いた。長い黒髪の女の子が小さな包みを持って立っていた。

一年生のバッジが制服の襟にとめてある。

「なになな？」

優しく訊くと、少女は持っていた包みを両手で差し出した。

「あの、これっ、よろしかったら召し上がって下さい……っ」

「……ありがとう。そなた、名はなんと言っただ？」

「はいっ、若月綾子と申しますっ！」

「そうか。ありがたく頂戴する、綾子殿。気をつけて帰られよ」

につこり笑うと、少女は頬を染め、

「はいっ！ ありがとうございますっ！ あの、お姉さま」

「ん？」

「今、あの……大学生の方とお付き合いしていると聞きました……。とても、素敵な方ですか。あの、私、お姉さまとの方がお幸せになるよう応援しておりますっ！」

もう見ているこっちが恥ずかしくなるくらい真っ赤になりながら言

うと、深く一礼して走り去ってしまった。

その場にぼつねんと残されたたまきは怪訝に呟いた。

「大学生とお付き合い……？ 晴明のことか？ ……お幸せにとはどういう意味だ？」

その後、太一のマンションへ行つてこの一件を話して聞かせると、青年は大ウケにウケてしばらく笑いが止まらなかった。

今日もまた夜が更けていく。

新宿のオフィスビルの明かりもほとんど消えて、空は地上のネオンの反射でぼんやりと明るいのみ。

キッチンから声がかかる。

「博雅、今日はもう遅い。泊まっていくな？」

「おう。すまん。そうさせてもらう。あ、電話貸してくれ。一応家に連絡しておかねば、母上が心配しよう。一応女子高生だしな」

その言葉にぶーっ！ という吹き出す音と、次いで朗らかな大爆笑（？）がおこった。

おい、晴明！ とたまきが慥然とした声をあげる。

ダイニングにひよこつと顔を見せた青年は、くすくす笑つて詫びた。「すまん。忘れていた。つい、昔のように思つてしまつてな」

「まあ、俺もそうだが……。……なあ、晴明」
「ん？」

「その…こないだは、怒鳴つて悪かつたな。考えたんだが……あの時、お前わざとあんなことを言つたんだろう？ 俺がこの霊力を持て余していると言つたから……」

「……」

「結果的に、今はそうでもないと思つておるよ。俺が術や霊力そのものを磨けばその分効果的に使えるわけだしな。感謝している」

黙っていた太一は、軽く肩をすくめてみせ、にやりと笑つて言った。「礼は式神のひとつも使えるようになってから言ってくれ」

「……………。そうだな」
たまきもまた、にやりと笑い返すと受話器をあげた。

ここのところの娘の別人ぶりに、家の者は非常に心配し、否、当惑し、今夜の外泊の許可を得るのも一苦労だった。

確かに、今まで可愛らしく「お父さん」「お母さん」と呼んでいたものが、ある日いきなり「父上」「母上」などとドスの効いた声で呼ばれれば何事かと思うだろう。
気の毒というよりほかない。

「あ、そうだ、渡すものがあるのだ」

「？」

たまきの鞆の中から出てきたのは、可愛らしくラッピングされた数々の小さな包みや小箱。手紙までが出てきて、青年があっけにとられ、

「…………このかわいらしいラッピングの数々はなんだ…………？」

そう訊けば、少女はあっけらかんとして言ったものだ。

「ああ、それな。最近、何故だかよく下級生にもらうのだ。さっき話した子がくれたのは、その青い包み紙のやつだ。食べてもいいぞみんななかなか料理上手だ」

「ふうん…………」

なんか違うと彼は思ったが、口には出さなかった。

しばらく鞆をゴソゴソやっていた少女は、ようやく目的のものを取り出して、はい、と太一に手渡した。

小さな、守り袋のようだった。

「今の俺にはこれしかできません。呪符もまともには扱えん。だけど、靈力を込めて書くことはできる」

それは、十センチ四方の白い和紙に、俗に言う”セーマン”が描か

れたものであった。

かつて、彼自身が使っていた護符。

友の思いに、はからずも胸をつかれる。

「博雅……」

「なに、かつては俺もお前の護符にまもられたのだ。今の俺が描いて役に立つなら、何枚でも描くさ」

「ありがとう」

太一は護符を両手で包み込んだ。

その日も反閉の法は遅くまで続いたのだった。

闇だ。

漆黒の闇。墨で塗りつぶしたように、どこまでも黒い空間がとりまいている。

彼女……否、彼はこの色を知っていた。かつて闇とよばれた本来の色を……。今自分をとりまいているこの闇はまさにそれであった。

闇から、さまざまなモノが生まれた。

鬼と呼ばれたり、妖怪とよばれたものたち。当然、光からも生まれたものは限りなく存在する。だから、人は本能的に闇に恐怖する。人の心の鬼が形になる、唯一の、その色を。

だが、彼は恐怖にとらわれることはなかった。

それこそ、あの闇夜に聳え立つ羅城門へ玄象という琵琶を求め、単身行った男だ。豪胆さは、ひとの倍はあるのだろう。

あのときは、こんな霊力などこれっぽっちもなかったのだ。ただ、楽が好きだった。

そして、安倍晴明が親友だった。

今は自分に霊力がある。

博雅はふと思った。

——人の魂というのは、いったいどれほどのものを秘めているのだ

ろう、と。

奇しくも友人が言った、生きている人の魂ほど強く、美しいものはないのだという言葉。自分にも親友にも、また、誰にでも魂の中に秘め伏された力があるのだ。

昔、楽を嗜んだからといって、今、藤原たまきが無理にすることもない。今の自分が出せている最大限でいい。そうであればこそ、今世に生きる価値も楽しみもあるうというものだ。

そう、ぼんやりと思ったとき。

『……殿……』

『みな……さどの……』

（——ん？ 誰だ？）

『源博雅殿』

（おっ！）

ぼうつと、闇に浮かんだ白い炎。それが、ゆっくりと人の形へと変わった。

白い衣を着た老僧が、彼へ深々と一礼した。

『お初にお目にかかる。わしは慈眼と申す』

（……………）

『ちと、お頼みしたき義があり参った次第…。お聞き入れ下されようか、源殿？』

面妖な坊さんが現れたものと、彼は慎重に言葉を選んだ。

（それは……内容を聞いてみねば、いかんとも言いがたいが、老師……………？）

『おう。いかにも。いかにもじゃよ源殿』

老僧はからからと笑った。

まったく、面妖も面妖。面妖すぎる。この慈眼という僧、なんとなく、覚えがあるような、ないような……。

博雅の記憶だけでは、まったく思い当たらない名前であった。当然である。

『実は、源殿。源殿も感じたであろうが、上野のことじゃて』

(うつ……。また上野か)
うんざりとして、上を仰ぐ。

『城の護りとして結界を——桜のことじゃが、張っておいたんじやが、どうも最近、妙なモノが出入りしておりますの。日に日に強くなる。わしが見たトコ、結界の一つが破れたらしゅうて……。あの寺に居る者も、いまーだに気がついとらんですじゃ。——で、しょうことなし、関係のない源殿にお願いに参ったという次第ですじゃ』
博雅は腕組みしてうーん、と唸った。

結界だの、妙なもののだの、こういうことは晴明に頼んでほしいものだ。

そして、はた、と思い至る。

(老師、ちと尋ねたいが)

『なんなりと』

(江戸は風水で開拓したと聞いたのだが)

『いかにも。時の権力者を栄えさせるために。江戸という土地はまあ、人間が住むにはヒドイ土地で……。川が暴れてびちよびちよだわ、すぐ水に浸かるわ、やっとこさ水が引いたかと思えば草ぼうぼうだわで、そらあ、たいへんな土地じゃったです』

(ほう)

『んで、しょうことなし、利根川をあつちのほうへ流してやって、川を分散させて城を”くるわ”にしたと……』

(ふむふむ)

『それから丑寅うしとらの方へ言霊の法によって寺を置きましたな。未申の方に神社を持ってきて、押さえられている、ということですかの』

(ほう、すごいな)

『……ですが、一つ落とし穴がありましたな』

(落とし穴……?)

首を傾げる博雅に、慈眼は深く頷いた。

『人の心というものの確固たる存在の、不確定要素のことですじゃ』
(????????)

『それもこれも、艮であるが故じやて……』
(????????)

——老僧によればこうであつた。

寺社で大晦日に、艮の方角へ向かつて読経、祈りがささげられるのは、「艮」という方位が十二支でいえば、丑寅——丑は十二月、寅は一月を示し「艮」は丁度その継ぎ目にあたる。つまり、終わりと始まりの瞬間といえ、わかりやすかるうか。

仏教では、釈迦の成道がこの刻限であり、また、三世諸仏の成道の刻限でもある。山海経（中国古代の神話・地理書）では、鬼が集まるといので、「鬼門」と呼ばれるようになったらしい。その中国で忌み嫌われる方角・時としての「鬼門」という言葉は後に仏教に取り入れられたようだ。

なるほど、考えてみれば鬼の通り道にしては、家々の東北——つまり鬼門にあたるところは、必ず清潔に保たれ、家の隅にあたる場合には、大概、上水道の水道栓が設置されている。

また、対角線上にある未申の方角もまた、植物を植えるなどして垣根をつくったりもしている。

鬼の道が美しく保たれている、というのが博雅あたりの感覚では不釣合いに思われるのだが、それは本来の丑寅の意味が、後から入ってきた「鬼門」という名の中にちゃんと残っているからであろう。

ともかく、艮を特別意識するのは、そういう土台があつたからである。

本来、神聖な場に妖気が沈滞しているというのは、やはり、ただごとではないのだ。

（うーん）

気にかかるのは、魑魅魍魎を内包してしまう器を持つ晴明にこれを相談すべきかどうかだ。相談すれば、必ず一緒に来るだろう。己が護りもどこまで効くものか見当もつかない。

博雅にはこれがいちばん恐ろしいのだ。

（これは、やはり……一人でやるしかならう……）
博雅は腹を決めた。

（なんとかしてみよう）

『おお！ よしなに！ よしなに、な、源殿』

老僧は嬉しそうに手を打ち、頭を下げてふわりと消えた。

後編<2>

突然、目が覚めた。反射的に飛び起きる。

カーテンの隙間から薄日が差しこんで、部屋の中はぼんやりと明るかった。

自宅ではないことに気づき、昨日、太一の家泊まったのだと思う。

いつ眠ったのか覚えていない。見れば、自分はベッドに寝かされていた。親友の姿はなかった。

そうっと、起き上がり、リビングのほうへ行くと、かすかな寝息がソファから聞こえている。

少し、悩んだがどうにも上野が気になって仕方ないので、黙って行くことにした。

ぼそりと呟く

「すまん」

聞こえていようがいまいが、悪いと思ったら謝るのが博雅という人物だった。深々と頭を下げ、静かに外に出ていった。

ドアが閉められた後、ソファからむくりと身を起こした青年は、

「……何を今更水臭いことをするのだ。誰に何を吹き込まれたか知らないが……まったく腹立たしい」

仏頂面で、しかもこの上ない低音で呟くと、彼もまた外へと出ていった。

目的は寛永寺。慈眼大師が言った”結界”のうち、どれが破れたというのか、確かめようと思った。

だいたい、寛永寺からして、江戸の鬼門封じなわけだし、それを更に桜の浄化作用である。慈眼の言った”人の心という確固たる存在の不確定要素”なるものが結界になにをもたらししているのやら、頭

で考えたところでどうにかなるものでもなかった。

「すこぶる嫌な感じだが、百聞は一見にしかず、だ」
呟いて、はたと気がつく。

——せめて、なんか効果的な呪法を教えてくださいとくんだったなあ——と、嘆いたところで遅すぎた。

あの男のことだ。聞けば聞いたで、なにかを掴んでしまっただろう。

上野公園に入って目的地へ近づくにつれ、妖気が強くなってくる。体温が少しずつ奪われていくのがわかる。足先から冷気が這い上がってくるのだ。

思わずぶるっと体を振るわせた。

（くそっ、負けるか！）

だんだんと、地を這う黒い瘴気が濃くなる。それにとらわれれば足をすくわれてしまっただろう。

たまきは口を引き結ぶと、瘴気の濃いほうへ濃いほうへと進んでいった。

——しかし。

道が反れた。

瘴気は寛永寺から流れているのではない。

「どういうことだ……？」

国立博物館の方、そこを進んで行くと両大師堂がある。

（——！？）

たまきは立ち止まった。

どういふことなのだ。

たまきの混乱も無理からぬことだった。

桜でも寛永寺でもない、この堂から瘴気が噴き出しているのだ。

「うつつ」

咽の奥で唸り声を上げたたまきは、握り拳をつくり、ゆっくりと大師堂へと近づいていった。手で鼻と口を押さえて、恐る恐る中を覗

く。

「それは慈眼大師と慈恵大師だよ」

ふいに、よく知っている声が、多少の苛立ちを含んで背後からかかった。

文字通り飛び上がったたまきは、勢いよく振り返り、

「せつ、清明っ！ 寝てたんじゃないのか!？」

「おぬしが起き上がるまではな」

たまきがなんと言い訳しようか、へどもどしているうちに、青年が不機嫌そうに喋り出した。

「だいたい、おぬしの行動パターンくらい判るものは、ワタシには無いんだよ、博雅くん。ワタシの身を案じてのことはとても嬉しく思うが、かと言って、”ワタシと同じその霊力を持ちつつ”持て余している状態で、あの——と言ってもワタシには肌寒い程度だが——妖気を鎮めるのにどうしようってんだか……」

独り言か、たまきに言っているのか判然としなかったが、置いてけぼりをくって怒っているのは確かだった。

「いや、清明。俺の描いた護符が役に立つかわからんし、反問とて本当に効いているのかわからんのだし……」

慌てて弁解するが、ぴしゃりと遮られた。

「ワタシの護符にケチをつける気が、博雅？ それはな、五行そのものなんだぞ。太極より両極が生じ、それがまた別のものを生みこの森羅万象を形成する、そのワタシの護符は森羅万象そのものの力タチなのだぞ」

太一はずずいと迫ると、威圧的に少女を見下ろして指を突きつけた。
「う わかった……と思う……。しかし、それはお前が使ったときであって……」

「わからんやつだな。さつきから”それ”は俺の霊力と同じものだと言っているではないか」

「——なに？」

「簡単に言つとだな、お前の霊力は、俺の霊力なのだ」

たまきは、しばしの沈黙の後、その言葉を反芻した。

「なぜだ、晴明……？」

「何故、とは？」

「なぜ、俺に、お前の、霊力があるんだ！？」

「それはワタシの預かり知らぬことだよ、博雅くん。どっちだっていいではないか。俺とお前が一緒に居ればたいした差はなかるう？」

「おっ、お前……っ！ そんなもんか……っ？！」

パニック寸前、目を剥いた少女とは対照的に、青年のほうはしれっとして、のんきに空など見上げている。

「そうさ。使い方は俺が教えてやろう。使役するのはお前だ。まあ、厄介なのは神将かな……。あと式神はすぐ使えるだろう」

さくさくと方針を決めていく青年に、ちよつと待てと手をあげ、しばらく額を抑えていた。

確かにこのままでは、霊力をもてあましてしまうだろう。使い方を教えてやろうという。有り難いことだ。それはわかる。いや、問題はそうではなく、何故、晴明の霊力が自分にあるのかだが、当の本人はどっちでもいいなどと言っているし………

大きく溜息をついた少女は、とりあえずこの問題を頭の隅に追いつた。

ええと………？

「式………？ 現代ではいらんだろう？」

「いらんでも、使えるにこしたことはないのさ」

「うぬ」

いいように言いくるめられてしまったような気もするが、たまきは氣をとりなおし、もう一度大師堂を覗きこんだ。

妖氣が渦巻き、視界を邪魔したが彼女の目に、黒い瘴氣を噴き出す根源——慈眼大師の像がしっかりと映った。

「あのジジイ！ 俺を騙したのだな！」

怒りがこみ上げてきて、知らず呪を放ってしまった。

バシッ！ という激しい音と振動が、二人に跳ね返ってきた。

「なんだ、博雅？ どうした！」

突然の風に驚いた青年は思わず袖で口元を覆ったが、さっきの衝撃で少女の方は大師堂から吹っ飛んでいた。

「慈眼のジジイめ、貴様が諸悪の根源か！」

尻餅ついたままの姿勢で大師堂を指差し、弾劾する。

太一は目をぱちくりさせた。

「まて、博雅。何を言ってるんだ」

「あのジジイが、夢の中に出てきて、鬼門封じを俺に頼んでいったのだ。結界の一部が破れたらしいなどとほざいて……」

「……………。それで、今日…………？」

「ああ」

太一はため息をついて、突風に転がった少女の傍らに膝をついた。

「あのな、博雅。たぶん、ここは”結界内”だ。それに、慈眼大師ともあるうものが、怨霊などに捕らわれたりはしないだろうよ」

たまきは、太一を見上げる。たまきは…………いや、博雅には慈眼大師が何者なのか、解ってはいなかったのだ。

またため息をついた青年は、ゆっくりと、含めるように言った。

「藤原たまきの記憶も少しは使えよ。慈眼というのはな、江戸を風水によって作り変えた張本人、天海のことだよ」

「……………なにっ!？」

たまきの気が、一瞬抜けた。それが、合図のように堂の扉が勢いよく開かれて、黒い瘴気の塊が一陣の風となって襲いかかってきた。

「……………」

「晴明っ！」

かばおうとしたときには遅かった。

瘴気は太一を取り巻くようにぐるぐる回り、そして、吸い込まれるようにして消えた。

「……………」

たまきの目が大円に見開かれる。これこそが、彼女が一番恐れていた

たことだったのに。

わかっていたのに。

「いわんこっちゃんいっ！ 護符など役に立たんじやないかつっ！」
だれに八つ当たったところで仕方なかったが、咆えずにはいられなかったのだ。

『——ふっ』

「せ、清明……」

太一の口が、不自然に、にいつと横へ裂けた。

『さよう。慈眼とは天海なり。あやつめ、どこへ逃げた……？』

『まあ、よいではないか。そのうち我らの中へ吸収してくれようぞ』
奇妙なことに、同じ口から別の声が聞こえる。しかも、一人、二人ではない。

ざわざわと、好き勝手にいろんなモノが騒いでいるのだ。

（……こやつら、何かの集合体か……？）

妖気が太一の身体から噴き出し、流れ出て、辺りに充満していくようだった。

「清明っ！」

『無駄じゃ無駄じゃ』

『この器、気に入ったぞ。我らをゆうゆうと抱えおるわ』

くくっ、と喉を鳴らした太一は、すでに清明でも太一でもなく、ましてや人間でさえない”気”を放っていた。のっけから太一に憑かれるとは、自分の間抜けさに齒噛みする思いだった。あの穏やかに笑う友人が、こんなわけのわからないものになってしまふのは、どうにも我慢ならなかった。

太一に憑いた”鬼”は、瘴気をそこらじゅうに撒き散らしながら、公園の方へと向かって移動しはじめていた。

「いかん……！」

もう、迷ってなどいられなかった。自分にできるのは、今までやってきた反問で、あの鬼を閉じ込めてしまうことだけだ。

その、反閉の法のひとつに、尼僧が編み出したといわれる尊星都そんじょうと藍禹歩作法と呼ばれるものがある。尊星とは、北極星のことだ。

たまきは気を静め、霊力を高めた。

「天蓬っ！」

強く言霊を発し、たん！ と左足を踏み出す。

『ぬ……？』

出した左足に、右足をつけ、

「天内」

右足を出し、左足をつける。

「天衝」

たん！

たん！

『う……うぬ……』

「天輔。天禽。天心。天柱。天任。天英……」

星の名を唱えつつ、たまきは鬼の周りをめぐる。

『うぐぐ……』

鬼の身体は硬直しはじめ、抵抗をするように、ぶるっ、ぶるっと震えが走った。

たまきは、北極星の名を持つ青年のまわりを、清め鎮めるように地を踏み、悪霊を破らんと、霊力を込めて、舞い始めた。

『うつ、がが……』

たん！ たん！ たん！

たまきの霊力が封陣となり、鬼を完全に閉じこめた。

その、陣を固めるかのように立つ存在に、はじめは気がつかなかった。

ぼんやりとした影が一人、二人と現れ、鬼を囲んでゆく。

彼女は舞いつづける。

陣を固めたのは十二人。古風な鎧に身を固め、手に手に武器を持ち、中央をじっと見つめている。

『おのれ。忌々しい術者め……。この程度で我らを封じられると思うてか……！』

妖気がたまきに襲いかかった。さながら、生き物のように巻きついて、少女の首を締め上げた。

「くっ……」

十二の人影は微動だにせぬ。たまきとて、はなから助力など欲してはいなかった。

全身全霊をかけて叫んだ。

「悪鬼調伏、急々如律令！」

細い指が印を切る。瞬間、十二人が一斉に鬼へと襲いかかった。

『があああつ』

鬼が咆え、襲いかかる彼等に向かってめちやくちやに暴れだした。妖気から開放され、軽く咳き込みながら鎧武者らを見つめる。

（何だ、あれは……？）

疑問も一瞬。

たまきは決然と上体を起こして、青年の魂に向かって叫んだ。

「晴明っ！ 晴明、聞け！ おぬしにこの霊力を返す！ いいか、しかと受け取れ！」

それは呪。

あざやかに印を切ったたまきは、すべての力でもって、太一へその霊力を注ぎ込んだ。

『ぎゃあああああああつ』

断末魔の叫び。

青年の身体に吸収されゆくたまきの霊力は滝のように激しい奔流であった。それと鬼の集合体である塊とが一つの体内でぶつかり、争った。

「うおおっ！」

たまきは最後の力までも青年へと注ぎ込み、そして、そのまま地へくずおれた。

少女の霊力の波は、やがて鬼の塊を押し流し、一片たりとも逃すことなく焼き尽くし、消滅させた。

淡い燐光を放ちながら、太一がゆつくりと身を起こす。ずらりと足元に控えたのは十二神将。

「——この世では、私は主ではない。いずれ、あの娘から召喚されよう。それまで、いましばらく待て」

青年の指先が、慣れたように印を描く。

深く一礼した神将たちは、スイと掻き消えた。

命の炎をすべて放出させた親友の、小さな身体が横たわっている。その、傍らに跪くと、青年は低く呟いた。

「博雅……この阿呆……」

かざした手から、きらきらと光るものが少女の身体へと流れ落ちてゆく。

それは、たまきの——博雅のいのち。

彼は、その命の中に己の霊力と似て非なるものを見出した。また、限りなく似た魂であることも…。

「目が覚めたら、式の使い方をきっちり教えてやろう」

満足げな笑み。

青年は、たまきを抱えあげた。

『晴明殿……』

堂の中、ぼんやりと浮かび上がる白い影。慈眼大師であった。

『御礼申し上げます』

慈眼は、千年前の大陰陽師に深々と頭をさげ、消えた。

「……いまだ、江戸の護りにたっておられたか。徳川家康とは、魅

力的な人物だったのかな……」

眩きは、しかし誰も聞くものはいない。

振り向けば、彼の目に反閃によって作られた魔法陣の軌跡が鮮やかに映った。

後編<2>（後書き）

このお話は以前こちらに投稿させていただいていたものです。
続編の投稿にあたって再び投稿させていただきました。

「虚空の鑑」ともども、どうぞよろしくお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9218b/>

上野魔法陣異聞

2010年10月10日04時36分発行